

時	論
新	論
理	想 論

日本発「手学問のすゝめ」、世界へ

広瀬 浩二郎 (ひろせ こうじろう)

本館民族文化研究部

五感を活かす新学問

二〇〇八年一〇月、企画展用の資料を借用するため米国を訪問した。ここ数年、二月と一〇月前後の二回ペースで米国を訪ねるのが僕の恒例行事となっている。今回も各地の大学、博物館で有意義な意見交換をすることができた。僕は最近、さまざまなミュージアム、福祉関係者からの依頼に応じて、さわる“体験型ワークショップ”を実施しているが、このワークショップをアメリカで試してみるのが今回出張の隠れた目的でもあった。

乱暴な要約をするならば、二〇世紀までの近代的学問は目と耳による情報に力点を置いてきた。その代表が西洋諸国の見聞をベースとして『学問のすゝめ』を著し、民主主義的な立国論を展開した福沢諭吉だろう。二一世紀の学問には目や耳以外の感覚、五感の潜在能力を活用したあらたなスタイルが求められているのではないか。こんな熱い思いをもって、僕は触覚による手学問を提唱している。

手学問ワークショップでは三つの「こゝろ(考・文・耕)」をテーマとし、多様な物に触れる楽しさを味わう。ときには民博の収蔵品を借用し、暗闇のなかで触察してもらうこともある。また、視覚障害者とは「視覚を使えない弱者」ではなく、「視覚を使わない代わりに五感(触覚)の可能性を切り開いた人」だという積極的な障害者

像をアピールするために、点字の触読にも挑戦している。これ以上ワークショップの具体的内容を紹介したら、手学問の新鮮さがなくなるので、この辺でネタの出し惜しみをすることにしよう(興味をもたれた方は、民博でもワークショップをおこなう予定なので、ぜひご参加を！百聞は一触に如かず)。

手探りから手応えへ！

近年、ドイツ生まれの暗闇体験ワークショップ「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」(DID)が日本でも開催され、静かなブ



ボストン美術館で「手学問のすゝめ」について語る筆者 (2008年10月25日撮影)

ームとなっている。東京では常設化を求めめる声も高まっているようだ。DIDに對抗するつもりはないが(ちよっとあるかな?)、僕は日本発の「手学問のすゝめ」が世界に通用しうる斬新な障害理解、五感の可能性への気づきを促す体験学習プログラムになると信じている。

この自信を確信に変えるため、今回の出張中、ニュージャージー州プリンストンの日本語学校(小・中学生向け)、モンタナ州立大学(大学生向け)でワークショップを開いた。触覚を通して考える、自身の触覚(皮膚感覚)で得た情報を視覚や聴覚情報と交流・交換する、自分のなかに眠っていた触覚の潜在力を耕す。こういった手学問の意義が一〇〇パーセント参加者に伝わったとは思えないが、とりあえずワークショップは好評で、子どもも大学生も、さわる“豊かさ”と奥深さを感じてくれた。僕の怪しい英語力では対話式のワークショップをスムーズに進めることができなかったが、きつと回数を重ねれば手探りが手応えへと変化していくのだろう。

アメリカでの二回のワークショップ経験を通じて、僕は「手学問のすゝめ」が文字どおり誰もが楽しめるユニバーサルな企画になるきっかけをつかんだような気がしている。これからも手学問の必要性を国内外で大いに宣伝すると同時に、手学問が実践できる貴重な博物館である民博の魅力を発信していきたいものだ。

